

理想の音を目指して、不断のチャレンジが生み出す

まろやかでコクのある 絶妙の"カレー"サウンド

前園俊彦さん(オルトフォン・ジャパン社長の巻)

自他ともに許す各界のオーディオマニアにご登場願って、オーディオへの情熱や人一倍の思い入れを存分に語ってもらう「オーディオ名人録」。第1回はアキュフェーズ社社長の出原眞澄さん(第10号)だったが、2回目の今回は、その出原さんご指名のオルトフォン・ジャパン(株)社長、前園俊彦さんである。前園さんは40年米のオーディオファンであるとともに、一流シェフも舌を巻くカレー料理の達人としても知られる。

開口一番「オーディオはとかく特性をうんぬんしかちだが、むしろ数値に現れないものにこそ注目すべき。私の場合は存在感が大切だからエネルギー感の再現を重視している。特に中・低域のそれは重要」とキッパリ言い切る。さらに、決してデジタルを否定するわけではないが、と前置きして「例えば、ウッドベース特有の響きとかホーカルの表情にも、ナマのもつエネルギー感が伴えば一層の追真感が加わるが、この点では今のところアナログに分がある」と続ける。

とはいえ、一見頂上を極めたかに思えるアナログも「カートリッジひとつとっても、まだレコードの情報を100パーセント拾い上げているとは言えず、実際には最も良くても90パーセント程度では」と言う。その意味でカ

ートリッジは、あれもこれもとまだまだやり残していることがあると、一段と口調は熱っぽくなる。ここからは、プロであると同時に



メインスピーカーはJBLの5ウェイ4350、スーパーウーファーとしてJBLのB-400やヤマハのYST-SW1000も稼働中



アナログ再生システムはマイクロSX-5000×2+オーディオクラフトAC-3000、カートリッジはもちろんオルトフォン

アマチュア感覚を大切にカートリッジを見つめ、何としても具現化したいとする前園さんの並々な情熱が感じとれる。と同時に、これがMC5000やSPU Gold Referenceなど、ハイエンドマニアの心をとらえる、一連の趣味性の高いモデルを生み出す原動力になったという気もする。

さて、オーディオの楽しみについて「自分が理想とするサウンドに向けて、不断のチャレンジをすること。この、あれこれ考えながら一歩一歩求める音を作っていく過程が、なんといってもオーディオの大きな楽しみ」と説く。この言葉には、長年苦勞しながら常に自分の音を目指してきた、キャリアの重みが感じられる。そして、高価な製品を集めてシステムを組みさえすれば、すぐにいい音が楽しめるといった、だれもが一度は陥りやすい

過ちへの戒めともとれる。

木造でありながら、400Hzで遮音特性40dBを誇る15畳ほどのリスニングルームで、まる一仕夜(これでも仕事の都合で少ないとき)煮込んだというこだわりカレーをご馳走になりながら、個性豊かな「前園サウンド」を聴かせてもらった。深々とした奥行きと温かみのある声で熱唱するエラ・フィッツジェラルドが、ことに印象的。そのダイナミックでエネルギー感あふれる響きは、適度にスパイスの効いたまろやかでコクのあるカレーにも似て、まさに絶妙の味わい。それはまた、要所をピシッと押さえた前園さん一流のオーディオ観そのものともいえる。ともあれ、後味も実にさわやかな訪問であった。

取材・文 篠田寛一
撮影 米田泰久